三浦綾子記念文学館と能登への旅

たもん

旭川市にある外国種見本林のストローブマツ並木の間を歩いていると、冬の気配が感じられた。私が住んでいる神奈川県では、十月になっても残暑がつづいているのに大きな違いである。見本林の中には三浦綾子文学記念館が建っている。今回の北海道旅行の予定に、この記念館への訪問を入れる気になったのは、三浦綾子の「泥流地帯」を読んだからだ。大正時代の十勝岳噴火による大災害を描いた小説である。災害の痛手から復興しようとする人たちの想像を絶する苦労に、今年起こった能登半島地震と復興途上の能登地方を襲った水害を重なった。

　昨年の秋、能登地方を旅した。珠洲市では、奥能登国際芸術祭が開催されていた。もう使われなくなった学校や駅舎を利用したアート作品の中には、自然や宇宙との一体感感じさせるものがあり心が震えた。今、震災関連のニュースを見ると、私の旅の記憶の中にある能登の風景とは変わり果てた映像に心が苦しくなる。

　私は一年半前にアルコール依存症専門病院を退院した依存症患者である。アルコール依存症は治癒することのない病気だ。飲酒を自分の力でコントロールできなくなり、自力で立ち直ろうとして失敗を重ね、酒の泥沼の中に沈んでいく。ある程度の期間酒をやめられても、再飲酒すればもっとひどくなり、生活や健康がめちゃめちゃになる。酒を飲まなければ良いわけだが、これを独力で達成するのはきわめて困難だ。アルコール依存症の平均死亡年齢は五十四歳程度といわれている。

私は、アルコール依存症患者が断酒をつづけるための自助グループであるアルコホーリク・アノニマス(AA)に参加している。AAには「12ステップ」という依存症からの回復プログラムがあり、その中には〝自分より大きな力〟を信じ、自分をゆだねるという部分がある。ここを理解するのは私には難しかった。信じるとは、ゆだねるとは、どういうことなのか？自分より大きな力とはすなわち神なはずである。私はすがるような気持ちで、父親が持っていた古ぼけた聖書を手に取り読み始めた。旧約聖書の中で一番心に留まったのがヨブ記である。ヨブ記は「泥流地帯」の作中でも引用されている。「なぜ罪のない人たちに過酷な試練が与えられるのか？」ということが小説のテーマになっているからだ。

　私は、なりたくて依存症のなったわけではない、しかし自力では依存症からの回復は望めない。そのためには神の力が必要なのだ。アルコール依存症は神から与えられた試練だと考えればヨブの気持ちに寄り添えるかもしれない。ヨブや能登の被災者の苦しみに比べたら、私の困難は、転んで膝小僧を擦りむいた程度のものなのだ。そう思って生きていこう。人生という旅の伴侶に聖書は欠かせないものとなっていくはずだ。

本文1126字